

●昔からつたわる話 伝説「アッパ沢童子」

昔、山白石の橋上沢に古い酒屋があった。そこではたらいていた女の人が草刈りかをしている時に男の赤ちゃんを生んだ。女の人はその子を大きな石の上に木の葉のふとんをしいてねかせ、家に帰った。そして、毎日おちちを飲ませに通っていた。男の子は、すくすくと育っていったが、大きくなるにつれてしだいにらんぼうになり「人の血をのみたい。」などというようになった。

まわりの人たちは、この男の子を「アッパ沢童子」とよぶようになった。ある日アッパ沢童子は、水にうつった自分のかおのみにくきにおどろき畑田はただの雲五郎山くもごろうやまに行ったのちに里白石の社川のふちに住むようになった。その後松野入にうつりすんだが、そのころになると頭には16本のつのがはえてきた。童子はその後丹波の大江山たんばに行き酒呑童子しゅてんどうじのなかまになり、ひとびとにらんぼうをしたりわるいことをするようになった。やがて、源頼光みなもとのひこう、渡辺綱わたなべのつな、源定光さだみつ、坂田金時さかたのきんときたちにたいじされたという。



このほかにも、町には、「えくぼごぜん」「おなせき」「ねばり松」「黄金千ぱい」などの、いくつかの伝説があります。

私たちのみじかに、昔からつたわる話があるかもしれません。おじいさんやおばあさんに聞いてみましょう。